

舞踊鑑賞の視点に関する事例研究

原 田 純 子

A Case Study on Viewpoints of Dance Appreciation

Junko Harada

抄 録

舞踊（ダンス）は“動き”を“動き以上のもの”として出現させるはたらきを持つ（松本1982）。その舞踊の学習において「鑑賞」は有効な体験である。本稿では、異なる5つの舞踊の鑑賞をおこない、その感想文の分析により、どのような視点を持って舞踊鑑賞が行なわれているかを分析した。その結果、「身体」「運動」「作品」という目に見えるものに対する気づきは多くみられたが、「情調」「演者の個性」「作者の意図」など、いわゆる“動き以上のもの”を読み取る視点が少ないことが明らかになった。

キーワード：舞踊鑑賞、視点、動き、動き以上のもの

(2004年9月30日 受理)

Abstract

Dance has a function of emerge “movement” which is something more than just movement (Matsumoto, 1982). Dance appreciation is an effective experience for learning dance. This paper examines the view points of dance appreciation when students appreciate five different dances.

As a result, students can see dances from the points of “body,” “movements,” “artistic works,” but there is a lack of viewpoint of reading “virtual entity” such as “feeling value,” “dancer’s personality” and “intention of choreographer.”

Key words: dance appreciation, viewpoint, movement, virtual entity

(Received September 30, 2004)

1. 緒言

舞踊（ダンス）の学習には「創る」「踊る」「観る」の3つの体験がある。なかでも「観る」体験すなわち鑑賞の学習には、学習成果としての作品をお互いに鑑賞しあう体験、そして専門家などの作品を鑑賞する体験がある。さらに「創る」体験すなわち創作そのものが、つねに動きを見てイメージに合ったものを選びながら進めていく過程であることを考えると、舞踊創作それ自体が鑑賞の行為を含んでいるといえよう。松本（1982:99）は舞踊の鑑賞について、「自分のもたない新しい個性にぶつかることは、自己にめざめ、他者を理解するに至る機会であり、殻を破って出るための必要な機会でもある。さらにすぐれた作品に接することは、技巧上の巧みさへの開眼とともに、作品を通して受けた感動は、人々の内に深くひびいて、人生に、永続的な価値を求める感情を高める契機となる。したがって、舞踊の特性から考え、すぐれた作品の鑑賞の機会をもつことは、創作と同等に重要なことと考えられるだろう」と、学習における舞踊鑑賞の価値を述べている。また、原田・柴（1995）は異なるジャンルの舞踊の鑑賞体験から認識される舞踊の局面を分析し、舞踊の本質的価値、すなわち身体による表現活動は人間の基礎的な創造活動として、男女の区別なく体験されるのが望ましいことが、舞踊のジャンルを超えて共通に認識されると明らかにした。さらに島内ら（1996:18）は大学生の舞踊鑑賞技能の実態把握をし、舞踊作品の鑑賞受容の仕方に5つのタイプ^①があることを導いた。

さて、上述のように舞踊の鑑賞は学習として有効な一体験であり、舞踊のジャンルによってもそれぞれに異なる局面が認識されるが、鑑賞する側（学習者あるいは評価者）の受けとめと、どのような舞踊を鑑賞するかという鑑賞対象とする舞踊の選定は、学習の効果を左右する大きなポイントであると考えられる。とくに、高さや速さを競う他の競技とは異なり、舞踊はよし悪しが判定しにくい。それゆえ、何をどのように評価すればよいのかが分からないという学習評価の難しさは、ダンス学習、表現運動学習の指導が敬遠される一要因ともなっている。このような問題を考えると、対象とする舞踊の何をどのようにとらえるかという鑑賞の力が舞踊鑑賞の学習効果を大きく左右するといえよう。

そこで本稿では、人間行動・表現学科に所属する大学生を被験者とし、他の学科に属する学生よりも授業において人間の運動や表現活動に触れる機会の多い彼らが、どのような視点を持って舞踊を鑑賞するかを把握し、被験者らの舞踊学習にとって有意義な知見を得ることを目的とする。

2. 舞踊鑑賞の位置づけ

今回の舞踊鑑賞は、K大学発達科学部人間行動・表現学科の「身体表現論」の授業の一貫として実施した。授業内容（表1）は、我々が日常において意識的におこなう「身体表現＝舞踊」を考える上で、まず表現の媒体である「身体」がどのようにとらえられてきたかを理解し、その後、舞踊の身体の周辺にあるコミュニケーション、感性、創造性、イメージ、空間などについての講義をおこなった。本稿で取り上げる舞踊鑑賞は第6週に実施し

表1：「身体表現論」の授業内容

回	内 容
第1週	オリエンテーション：「身体表現論」について
第2週	「身体」をどのように捉えるか
第3週	身体観の歴史～「身体」はどのように捉えられてきたか
第4週	日本人の身体観
第5週	身体が受信・発信する情報
第6週	舞踊の身体～舞踊鑑賞でみる「踊る身体」
第7週	動きの感性学1～感性と身体
第8週	動きの感性学2～動きの感性学的視座
第9週	動きの感性学3～マイネルの動きの感性学について
第10週	創造的な活動が育むもの
第11週	創造性の周辺
第12週	イメージをめぐって
第13週	身体と空間
第14週	舞踊という身体表現

たものである。鑑賞は、何も説明を加えずに作品を見せ、1作品観終わるごとに感想を書くという形で進めた。その後、作品について、その時代背景や振付者、作品についての解説をおこなった。

鑑賞対象としたのは時代の流れに沿って選んだ、その時代を象徴する振付家あるいは舞踊ジャンルの作品である。古い時代の日本の舞踊の映像が入手困難であるため、今回はすべて海外の作品より5つを選択した。表2にその詳細を示す。

3. 鑑賞対象とした舞踊とその身体について

舞踊は表現の媒体として『身体』を使う点に特徴をもつ。アダム・スミスが「社会的背景を、舞踊の発達における、要素である」(R.ランゲ, 1981:40)と指摘しているように、舞踊における身体は時代や社会の影響を受け、それぞれの時代の作品に異なる形で存在している。そこで今回は、『身体』に着目して、表2に示す5種類の舞踊作品を選択した。それぞれについて以下に述べる。

①「パリオペラ座(古典バレエ)」は、モダンダンスとは異なる身体性をもつものとして選択した。バレエにおいて身体はあくまでも道具であり、伝統的な動きや表現を可能にするためのものと考えられている。この貴族社会の伝統を色濃く残したヨーロッパのバレエに対抗して自由な新しい動きを模索しようと生まれたのが、初期(1920～30年代)のモダンダンスである。当時のモダンダンスは個人の感情や精神活動、思想などを表現することを最重要ととらえ、革新的な性格を備えている。作品においても身体の考え方、使い方は両者で大きく異なっており、その対比をみる意味で「バレエ」を鑑賞対象のひとつとして取りあげた。

②「マーサ・グレアム(モダンダンス)」はモダンダンスの発展期(1930～40年代)から活躍した舞踊家・振付家である。独自の動きのテクニック「グレアム・テクニック」を

表2：鑑賞対象とした舞踊

	舞踊の種類	内容の詳細 (①演目②振付③踊り手④作品について)	時間
1	古典バレエ (B)	①白鳥の湖 (バリ・オペラ座バレエ/1992年演) から第3幕・王子・ジークフリートと黒鳥・オディールとのパ・ド・ドゥ (黒鳥のパ・ド・ドゥ) ②ウラジミール・ブルメイステル (1953年振付) ③マリ=クロード・ピエトラガラ、パトリック・デュボン ④城の大広間で華やかに練り広げられる舞踏会にて、王子が、想いを寄せるオデットそっくりのオディールを本人と間違えて愛を誓うシーン。王子の母を初めとして、招待客が周りを囲んでいる。黒を基調とした衣装。音楽はチャイコフスキー。	9分22秒
2	モダンダンス (MD)	① Cave of the Heart (『心の洞窟』1946年初演) からの一場面 ② マーサ・グレアム ③ カンパニー女性舞踊手 (ソロ) ④ ギリシャ神話・エウリピデスの悲劇「メディア」に基づいた作品で魔女メディアの嫉妬と復讐を表現。メディアが勝利の喜びに酔うシーン。金・銀の刺繍のある黒いドレスを着て、小道具の赤い紐を持って踊る。背景にはイサム・ノグチによる前衛的彫刻である金属の枝が据えられている。音楽はサミュエル・バーバー。	2分08秒
3	ポスト・モダンダンス (PD)	① Changing Steps (1989年初演) からの一場面 ② マース・カニングハム ③ カンパニー舞踊手 (男性2人、女性3人) ④ 大きい窓のある板張りの屋内での踊り。衣装は男性2人がオレンジと薄い水色、女性がオレンジ、モスグリーン、グリーンの総タイツ。窓から芝生の庭が見える (赤い衣装 (総タイツ) を着た人が芝生の庭で踊っている)。音楽はジョン・ケージ (但し、今回の鑑賞場面は無音)。	3分47秒
4	モダン・バレエ (MB)	① Sleeping Beauty (1999年) ② マッツ・エック ③ クルベリー・バレエ団舞踊手 (男女) ④ 最初から車が出てくるシーンまで。男性はグレーの三つ揃い、女性はグレーのワンピースを着ている。日常のシーンといった感じの設定。動きも日常動作が踊りになっている。音楽はチャイコフスキー。	6分20秒
5	コンテンポラリー・ダンス (CD)	① Critical Mass よりルンバの場面 (1999年演) ② ラッセル・マリファント ③ ラッセル・マリファント、ホルデイ・コルテス・モリーナ (男性2人) ④ 舞台作品を映像化したもの。男性によるデュオ。全体的に暗い照明、格子のついたような背景、後ろから照明が当たっている。コンタクトの技法を多用した動き。音楽はオリジナル。	3分19秒

確立し、当時のモダンダンス界では中心的存在であった。グレアムは、人間の内面を反映した表現主義的なものとして身体をとらえており、とくに40年代後半から60年代の作品では憎悪、嫉妬、苦悩、絶望など人間の内面にたぎる激しい感情を表現しているものが多い。

③「マース・カニングハム (ポスト・モダンダンス)」は戦後のモダンダンス期 (1940年代後半～50年代) から独自の活動を展開している。②のマーサ・グレアムが人間の内的感情を表現したのに対して、カニングハムは抽象的、客観的、現象的な側面から身体をとらえ、コインを投げて動きの順番を決定するような偶然性を利用する方法で作品の創作を試みたりしている。

④「マッツ・エック (モダンバレエ)」はスウェーデンの舞踊家、振付家である。バレエの名作「ジゼル」(1982) や「白鳥の湖」(1987)などを現代の時代に置き換え、大胆な解釈で作品化している。エックの作品は政治的・社会的な問題を扱ったものが多く、今回取りあげた「Sleeping Beauty」(1999)も時代設定を現代に変え、日常に満足できないわがままなティーンエイジャーが成長してゆく姿を描く作品となっている。

⑤「ラッセル・マリファント (コンテンポラリー・ダンス)」は、今日注目の舞踊家、振

付家である。強靱でありながら流れるような動きを生み出す身体は、これまでにない個性的な動きで独自の世界を構築している。

4. 研究方法

4.1 被験者および鑑賞の日時

大学2年生および3年生、男子16名、女子11名の計27名。（人間行動・表現学科に所属し、学科の必須科目である「身体表現論」の受講生。）鑑賞は授業の第6週・2004年5月25日におこなった。

4.2 方法

5種類の舞踊作品を鑑賞させ、それぞれの作品毎に鑑賞後の感想文を書くように指示した。被験者が記述した感想文は、松本(1980)が構造化した舞踊の要素に基づいて分析した。

松本ら(1980)は舞踊用語に関する一連の研究において、舞踊作品の批評文および紹介文の文章分析を行ない、舞踊の特質とその成立の諸条件を明らかにした(図1)(松本、1992:123)。本稿ではこれら16の要素を舞踊鑑賞の観点ととらえる。感想文の分類においては、『変化』と『連続』は『運動』に伴って生じるので、これらは3要素で1グループと考えた。また、『情調』も『身体』、『運動』、『作品』に付随することから、最初の分類では省き、内容の詳細を見た第2の分類の際に用いた。さらに『公演』は、今回の鑑賞においては関係がない要素と考えられるので省いた。

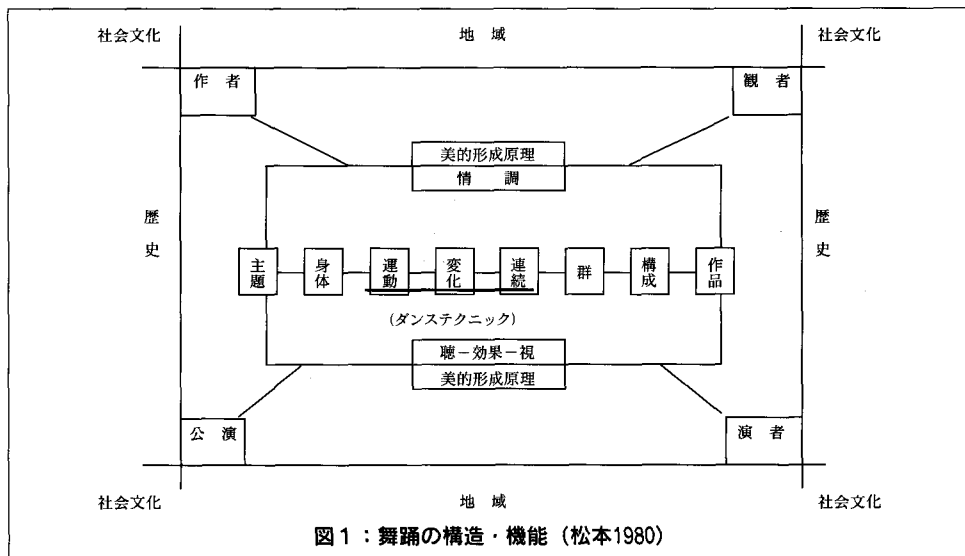


図1：舞踊の構造・機能（松本1980）

【整理・分析の基準】

1. 主題
2. 身体
3. 運動
4. 変化
5. 連続
6. 群
7. 構成
8. 作品
9. 美的形成原理
10. 情調
11. 効果
12. 作者
13. 演者
14. 公演
15. 観者
16. 社会文化

5. 結果および考察

5.1 感想文の記述数

表3には、舞踊鑑賞の感想文を文章に分け作品毎にその数を示した。コンテンポラリー・ダンスの感想が他の舞踊より少ないが、他の4つはほぼ同じ程度の文章数であった。

男女の比較でみると、どの舞踊も女子の方が多くの感想を記述したことが数字より明らかである。さらに、個人別の文章数の平均は、男子が1.2文から2.6文までであるのに対して、女子は1.8文から3.6文までの広がりがある(図2)。被験者たちは、いずれも大学2年次に舞踊系運動(創作ダンス)の授業を受講しているが、それ以前のダンス経験について、今回調査はしなかったため、この記述数の差が大学入学以前のダンスの経験の差によるものか否かは分からない。

5.2 記述内容の傾向

記述内容は先述の通り、松本による舞踊の16要素によって分類、整理した。表4にその数と記述内容の例を示す。(以下、文章中の「」は被験者の記述である。)

全舞踊ジャンルを通して、最も多かった内容は『運動(動き)』についてであった。バ

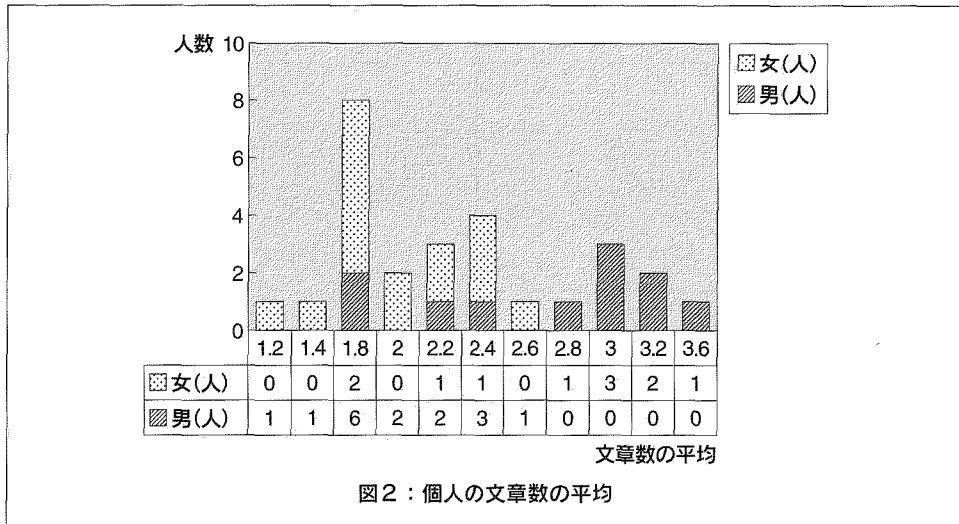


表3：感想文の文章数

舞踊の種類 (略記)	文章数		
	男(数/16)	女(数/11)	計(数/27)
1. 古典バレエ (B)	36 (2.25)	31 (2.82)	67 (2.48)
2. モダンダンス (MD)	33 (2.06)	29 (2.64)	62 (2.30)
3. ポスト・モダンダンス (PD)	34 (2.13)	34 (3.09)	68 (2.52)
4. モダンバレエ (PB)	31 (1.94)	31 (2.82)	62 (2.30)
5. コンテンポラリー・ダンス (CD)	24 (1.5)	25 (2.27)	49 (1.82)

表4：舞踊ジャンル別の記述内容の分類

要素	ジャンル	B	MD	PD	MB	CD	計	記述例（舞踊ジャンル：記述内容（記述者））
1	主題(T)	0	0	0	1	0	1	MB：仲がよくて愛しくて仕方がない感じがした(F3)
2	身体(B)	31	12	7	5	1	56	B：身体全体がやわらかかったが、特に手が特徴的だった(M16)
3	運動・変化・連続(M)	15	24	15	22	22	98	MD：静から動、動から静の動き、そしてねじる動きが多かったように感じた(M11)
4	群(G)	0	0	6	1	1	8	PD：複数の踊りのため、つながったり離れたり、お互いに助け合ったりしている動きもあった(F9)
5	構成(C)	0	0	6	2	3	11	PD：5人全体の位置や動きで空間のバランスを変えた造形作品のような印象を受ける(M8)
6	作品(W)	10	23	20	23	17	93	MB：日常的なストーリー性があり、みていて飽きなかった(F4)
7	効果(SE)	0	2	3	1	0	6	PD：音楽がなく沈黙の状態、跳んで着地したときに響く音が、沈黙をより際立たせていた(M13)
8	作者(Ch)						0	
9	演者(D)	4	0	1	1	3	9	B：その人自身が、白鳥になりきっているのがすばらしかった(M13)
10	観者(Au)	4	1	8	6	2	21	MB：どういう風にこのダンスを見ればよいのか分からない(M6)
11	社会文化(SC)	3	0	1	0	0	4	B：いかにもバレエという感じで、身体の機能美だと思った(F1)
	計	67	62	67	62	49	307	

レエでは「なめらか」「しなやか」、モダンダンス（以下モダンと記す）では「力強い」「小刻みな」、ポスト・モダンダンス（以下、ポストモダン）では「機械的な」「直線的な」、モダンバレエでは「日常的な」、コンテンポラリーダンス（以下、コンテンポラリー）では「ゆったりとした」「なめらかな」という形容詞でそれぞれの舞踊の中の動きがとらえられていた。

次に多かった記述は『作品』についてである。バレエは、指先まで神経の行き届いた動きや左右対称の隊形、動きそのものの形などから「優雅な」「形式的な」舞踊であるととらえられ、逆に、モダンは「自由」「型にとらわれない」、ポストモダンは「静と動がはっきりした」「抽象的な」舞踊と見られている。またモダンバレエでは「ストーリー性がある」ことが、コンテンポラリーでは「2人のダンサーの関係」や作品全体の「暗さ」について記述している。動きや形式の自由さといった最初の3つの舞踊でとらえられたものとは異なり、モダンバレエとコンテンポラリーでは作品の独自性に触れる記述が多かった。

さらに『身体』についての記述が続く。とくに記述数が多かったのはバレエであり、その内容は「爪先立ち」や「手の動き」、身体の「柔軟性」などに関する記述であった。モダンでは「身体全体」を使った表現、「眼」の鋭さが表現になっていること、ポストモダンでは身体の「柔軟性」と「たくさんの身体（5人）による表現」についての記述であった。またモダンバレエでは「お互いの身体にお互いのすべてを任せたいような」身体の使い方（“コンタクト”といわれる技法）についての記述があった。しかし同じ技法を用いているコンテンポラリーでは、そのような「身体」の使い方は注目されおらず、記述も「身体を柔らかく使い、ゆったり感が出ていた」という記述のみであった。

『観者』の立場からは、ポストモダンでは「何を表現しているのか分からない」という記述が最も多く、モダンバレエでは「ストーリー性があるから好き」「言い表したいこと

が素直に伝わってくる感じがした」と、全く逆の受け止めになっていた。

5.3 記述内容の意味微分

次に、記述数の多かった『運動』『作品』『身体』の項目について、その内容の詳細をみる。分析方法は、『運動』についての文章を、さらに前述の15要素(16要素から『公演』を省いたもの)で、微分していく方法である。

5.3.1. 『運動』について

『運動(動き)』に関する記述について意味を微分し、その内容を見た(表5)。「運動」については「小刻みな動き」や「沈み込む動き」のように動きそのものを説明しているものと、動きに『情調』をとらえているもの、例えば「苦しみや怒りなどを、怪しい動きで表していた」のような記述が多くみられた。つまり、見たままの動きとその動きをどのように感じたかという点に言及している。しかし動きのつながりや変化の仕方、主題と動き

表5:『運動』の記述内容の意味微分

	B	MD	PD	MB	CD	計	記述例(舞踊ジャンル:記述内容(記述者))
運動 主題	0	7	4	7	5	23	MD:バレエと違い動きが小刻みでリズムカルであった(M10)
	0	1	0	0	0	1	MD:柔軟かつ豪快な動きが多く情報を発信しているように思えた(M12)
身体 情調	0	1	1	1	0	3	MB:2人の男女がお互いの動作、そして身体そのものを利用した踊りで、相手を中心に回る動きが多かった(M1)
	1	0	0	0	1	2	B:どの動きを見ても体の美しさが表われていた(M9)
変化 主題 群 情調	0	2	1	3	1	7	CD:2人の動きの組み合わせで、動きの範囲がとても広がっている(M15)
	0	0	0	1	0	1	CD:動きに強弱があって、強の部分では喜びが、弱の部分では男女の淡い恋が表現されていたと思う(M6)
	0	0	0	1	0	1	CD:2人の息が非常に合っていて、やはり1人より2人の方が見ごたえがあるように思えた(M5)
	1	0	1	0	0	2	B:動きにメリハリがあって、あたかも白鳥が舞っているようだった(M14)
連続 演者	0	1	0	0	0	1	MD:動きにストーリー性を感じるが、(M15)
	1	0	0	0	0	1	B:一連の動作が非常に滑らかであり、2人のコンビもすごく完成されていた(M5)
作品	0	0	0	1	0	1	MB:日常的な動きが織り交ぜられているような気がして、表現されていることがよく伝わってきた(M13)
美的形成原理	2	0	1	0	0	3	B:動き一つ一つにポーズがあり、動きながらも一瞬“ピタッ”と形になっているのが美しく見えた(F3)
情調 効果	6	9	5	6	13	39	CD:しなやかでなめらかな動きがうまくつながっていて驚いた(F2)
	0	0	1	0	0	1	PD:音楽がないせいかもしれないが、動きが静かであるように感じた(F6)
効果 変化	1	1	0	1	2	5	CD:流れるような身体の動きが音楽とよくあっていた(M8)
	0	0	1	0	0	1	PD:無機質な動きによって、そこには不思議な空間が出来ていた(F10)
観者	2	1	0	1	0	4	MD:手も足も動かしているため、見ている自分の心もせわしく、落ち着いていられなかった(F7)
社会文化	0	1	0	0	0	1	MD:普段することのない動きが多く、これがモダンダンスなんだと思った(M6)
計	14	24	15	22	22	97	

の関係などについてはほとんど記述がなかった。またバレエ、モダン、ポストモダンでは動きの質を述べているものが多いのに対して、モダンバレエとコンテンポラリーは動きの質よりも2人の動き方や関係を記述しているものが多かった。これは、この2つの舞踊が“コンタクト”の技法を用いてお互いの身体や力を利用して動く振りを多用しているため、ひとりひとりの動きより、2人でひとつという動きをとらえているためと考えられる。

5.3.2. 『作品』について

『作品』に関する記述の詳細を見た(表6)。これをみると、作品の情調についての記述が最も多く、とくに感情表現が激しい今回のモダンダンスでは「衝撃的」、「怖いイメージ」、「奇妙な感じ」という言葉で作品全体がとらえられていた。

『作品』そのものについては、モダンバレエにおけるストーリー性のある展開に言及したものが多く、また映像技術等を駆使して撮られた現代の2作品(モダンバレエとコンテンポラリー)において、映像や衣装、照明に対する指摘が他の3作品より多かった。いずれも作品の一部のみの鑑賞であったので、群の変化や作品の構成など作品全体からみた方が把握しやすい事からについてはほとんど触れられていなかった。

表6：『作品』の記述内容の意味微分

		B	MD	PD	MB	CD	計	記述例(*ジャンル:記述内容(記述者))
作品		1	2	1	6	2	12	MB:日常的な動作も多く、演劇のようである(M4)
	運動	1	3	1	2	0	7	MD:型にとらわれることなく、表現に重きを置いており、その中に技術的な要素を組み込んでいる(F2)
	変化	0	0	0	1	0	1	MB:本来の生活での動きにアレンジを加えたような動きで、理解しやすい(M15)
	美的	0	0	1	0	0	1	PD:ジャンプも意図してタイミングをずらしているのかも分からず、完成度としてはあまりたかくなかったように思う(M5)
	変化	0	0	1	0	0	1	PD:間合いが絶妙であった。
	連続	0	0	1	0	0	1	PD:個々に存在しているように見えるが、どこかが動き出すときはどこかからの影響があり、関わり合いがあるのが面白かった(F3)
	群	0	0	1	0	0	1	PD:何人かで踊ることによって、また違った印象を受けた(M16)
	構成	1	0	1	1	1	4	CD:片方がもう一方の影のように見えるところもあり、また別のところでは、追いかけているような、まるで自分が眺めているように見えるところもあった(F3)
	変化	0	0	2	0	0	2	PD:「静」と「動」をうまく組み合わせしており、空間を利用していた。
	情調	1	0	2	0	1	4	PD:静と動がはっきりしていたのも、より機械的な動きに近づいている感じがした(M11)
	美的形成原理	0	0	0	1	0	1	MB:最初はバレエちっかと思いきや、そうでもなくて、音楽に乗った非常にリズム感のあるダンスだった(M7)
	情調	4	15	7	5	5	36	MD:本能とか、心の中にある感情をそのまま自然に出した感じ(F1)
	効果	0	1	1	5	4	11	MB:身体のほかにも、衣装、音楽といった効果も大きい(M16)
	情調	0	0	1	1	2	4	CD:今回のダンスは暗いところで黒系の服を着て踊っていたので、シルエットがとてもきれいに見えた(M7)
	演者	0	0	0	0	1	1	CD:暗くて、二人とも体格が似ていて、区別されなかった(F9)
観者	1	2	0	0	0	3	MD:モダンダンスを通して、何かを、見ている人に訴えかけている感じであった(M3)	
社会文化	0	0	0	1	1	2	MB:今までに見たことのないダンスだった(F11)	
計		9	23	20	23	17	92	

5.3.3. 『身体』について

『身体』に関わる記述を微分して、その内容を見た(表7)。

5つの舞踊の『身体』における明らかな特徴は、バレエと他の4つの舞踊の上半身の使い方であろう。バレエでは身体に一本の軸が通っているように、常に背中をまっすぐに伸ばして踊ることがほとんどであるが、他の4つの舞踊では、背中は丸く曲げたり、くねくねと波のように動かしたりと自由でしなやかな動きをする。その違いが、『身体』そのものの記述にあらわれている。また、バレエの場合は「手先爪先まで神経の行き届いた」「身体の末端まで意識を集中」させた身体と動きの関係をとらえているものが多い。他の舞踊においても、決して手足が曲がっているわけでも、意識が届いていないわけでもないのだが、バレエではトゥシューズを履いていることから、とくに手足の伸びや動きが、見るものの目を引いていると思われる。身体から情調が感じられていないのはポストモダンであった。これは作者であるカニングハムの意図するところであり、「無機質」「機械的」な動きをする身体からは、作者の狙い通り情調を感じ取ることがなかったとみられる。

5.4 舞踊作品をあらわす語句

それぞれの舞踊は、どのような語でとらえられているだろうか。記述の中に頻繁に出てきた語句を表8に示した。

これらから、バレエ、モダンダンス、ポストモダンにおいては『身体』とその『動き』をあらわす語が多く、モダンバレエ、コンテンポラリーではひとつひとつの動きや身体よりも、2人の動き方や『作品』そのものや作品に流れる雰囲気であらわす言葉が多く使われていることが分かった。

表7:『身体』の記述内容の意味微分

	B	MD	PD	MB	CD	計	記述例(*ジャンル:記述内容(記述者))
身体	9	5	2	0	0	16	MD: 髪の毛や眼までも身体の一部のように表現の道具として使っていた(F6)
運動	10	3	1	1	0	15	B: 長い手足を使って、また手の指先から足の爪先まで神経を使い、滑らかな動きを繰り出していた(F5)
作品	0	0	0	1	0	1	MB: 身体の軸があり、2人のダンスのからみなど、ストーリーがあり、分かりやすかった(M10)
情調	7	1	0	0	0	8	B: 手の動きが白鳥の羽のように見えて、羽ばたいている感じが伝わっていて純粋に美しいと思った(F7)
変化	2	0	2	1	0	5	PD: 身体が色々な形に変化していく「もの」のようだった(F9)
情調	1	0	0	0	0	1	B: 重心の高さの変化が動きを大きく見せ、一步一步がすばやいで、すごく軽やかな感じを受けた(M15)
情調	3	3	0	2	1	9	MD: 身体を小刻みに動かし、我を忘れたかのように身体のあらゆる部分を動かしていた(F11)
効果	0	0	2	0	0	2	PD: 表現というよりも人間の身体を使って、空間を構成していた(F10)
計	32	12	7	5	1	57	

表8：各舞踊を表すのに用いられた語句

(* () 内の数字は語句の出現頻度、3語以上のものを示した)

舞踊ジャンル	語 句
バレエ	神経が(行き届いた)(12)、きれい・美しい(9)、機能美・形式美(7)、爪先立ち(7)、柔らかい・柔軟な(5)、なめらか(4)、しなやか(3)
モダンダンス	細かな・小刻みの(7)、自由・型にとらわれない(6)、強さ・力強さ(5)、全身・身体全体(5)、感情(5)
ポスト・モダンダンス	機械的・無機質(6)、空間(6)、静と動(5)、音楽がない(4)、柔らかさ(3)
モダンバレエ	2人の動き(11)、ストーリー性(9)、日常的(6)、音楽・声(3)
コンテンポラリー・ダンス	2人の動き(9)、ゆったりとした(6)、なめらかな(5)、暗い(5)

6. 結 論

本稿では、異なる5つの舞踊の鑑賞をおこない、その感想文の分析により被験者がどのような視点を持って舞踊を観ているかについて分析した。

被験者の舞踊を見る視点はとくに『運動』『作品』『身体』に集中しており、ジャンルによってとらえ方に偏りが見られた。すなわちバレエでは『身体』、とくに手足に集中して、その記述が多く、他の4つの舞踊については『身体』よりもむしろ『運動(動き)』と『作品』の視点からとらえられていた。被験者は、人間行動・表現学科に所属する大学生であり、授業においても人間の運動や表現活動に触れる機会が多いため、『運動』『身体』に集中した、このような舞踊の見方は当然といえるかもしれない。

ただ、今回の鑑賞のための作品は、授業内容との関連から『身体』を意識して選択したものであった。その意図は、単に身体の使い方や踊る技能の異なりだけではなく、表現媒体としての『身体』もまた、それぞれの時代のなかで社会や文化の流れと共に、その影響を受け、作品の中に様々な形で存在するのだということへの意識を期待したのであった。しかし、残念ながら今回の感想のなかにはこのような意味において『身体』をとらえているものはなかった。さらに演者や作者に対して目を向けることは、舞踊を鑑賞する際の大切な視点であるが、今回は演者の個性にまで踏み込む記述はなく、作者に関する記述も皆無であった。

このようにみえてみると、今回の鑑賞ではほとんどすべての被験者が“目に見えるもの”だけを鑑賞の視点としていることが分かる。舞踊における運動(動き)は、イメージの内在于る動きであり、単なる動きを“動き以上のもの”として出現させる(松本、1982:9)。であるならば、鑑賞者はそこに見えている“動き”から“動き以上のもの”を読み取る、創造的な態度が必要であろう。それは、『情調』であり、『演者』の個性や『作者』の意図、イメージであり、また鑑賞者の実体験と掛け合わせて生まれてくるものであるのだが、これらは今回の感想の中にもっとも少なかったものでもある。

以上より、今後の舞踊学習においては「創る」、「踊る」という体験とともに、より『演者』や『作者』に踏み込み、創造的な視点を持った『鑑賞』の態度を育成する必要がある。

また、続く課題として、被験者に幾つかのコントロール群を設定し、舞踊作品の中に“動き以上のもの”を観ることができるようになるには、どのような要因が必要であるのかを探り、舞踊鑑賞における創造的視点の詳細を明らかにしたいと考える。

注) 島内らは、「全日本高校・大学ダンスフェスティバル—神戸」における受賞作品の鑑賞構造の分析から、以下の5つのタイプ(層)があることを導いた。①作者の主張をトータルに把握する②テーマの根幹に触れる内容を直感的に短い言語表現で把握する③作品の全体表現内容の一部や動きの一部を受容④作者の意図するテーマとは異なる内容に作品のテーマを見ている⑤作者の意図からさらに先を読みとり、一歩深めた発展的な鑑賞をしている

【引用・参考文献】

- 原田純子・柴 眞理子 (1995) “鑑賞体験による舞踊の認識に関する事例研究”『舞踊學』 17:11-17
片岡康子編著 (1999) 『20世紀舞踊の作家と作品世界』 東京 遊戯社
三浦雅士 (1995) 『バレエの現代』 東京 文藝春秋
松本千代栄 (1962) “舞踊の鑑賞に関する研究”『東京教育大学体育学部紀要』 3:74-83
松本千代栄 (1980) “舞踊用語に関する研究Ⅲ—批評・紹介記事の意味微分—” 第10回舞踊学会発表資料
松本千代栄編著 (1982) 『ダンス・表現 学習指導全書』 第3版 東京 大修館書店
松本千代栄編著 (1992) 『ダンスの教育学』 1
ランガー, S.K.・池上保太、矢野万里訳 (1979) 『芸術とは何か』 東京 岩波書店
ランゲ, ロアリーク・小倉重夫訳 (1981) 『舞踊の世界を探る』 東京 音楽之友社
島内敏子・北野啓子・石田五月 (1996) “舞踊作品の鑑賞技能の実態的把握”『舞踊學』 19
海野 弘 (1999) 『モダンダンスの歴史』 東京 新書館
ダンスマガジン編 (1995) 『バレエ101物語』 第5版 東京 新書館
ダンスマガジン編 (1991) 『ダンスハンドブック』 東京 新書館